

文和子氏によるもので、彼女の点としての活動が、ケニアでの障害児福祉のひろがりにつながっていく様子が淡々と語られた。

筆者はシンポジウム「ポストコロナ時代の移民の健康—アジアにおける新たな連帯にむけて」に座長として参加した。この企画は、日本、ベトナム、韓国、台湾のグローバルヘルスに関わる研究者や政府関係者が、国境を越える人々の保健医療についてどのように取り組むべきか、そのキックオフミーティングにあたるものであった。その目的は無事果たせたと思われる。

会場では口演発表、示説（ポスター）発表も多く行われ、筆者は「各国の状況に適した制度構築の重要性—アジアにおける UHC 施策の比較から」と題する一般口演を行った。対面参加者も多く、懇親会も立食形式で行われ、コロナから脱却できたと感じられた集会であった。（林 玲子 記）

インド国際人口研究所との研究協力覚書交換と研究交流会議

2023年3月7日（火）～同年3月10日（金）、インド国際人口研究所（IIPS）と国立社会保障・人口問題研究所の研究協力覚書の交換と研究交流会議に参加するため、林玲子副所長とIIPSを訪問した。

IIPSはムンバイにあり、その土地はインドでも屈指の経済発展地域である。高速道路や高層ビルの建設ラッシュはさながら60年代の東京オリンピック前後の日本を彷彿とさせていた。我々はムンバイの高齢者および幼年期の福祉施設を視察させて頂いたり、インドにおける人口学研究の現状を紹介して頂いたりと日印人口学研究交流の足がかりとなる情報を得ることが出来た。IIPSとの研究会は、少子高齢化について林副所長が、国際人口移動についてオンラインでは川夕国際関係部長がそれぞれ報告を行い、議論が行われた。著者は専門である数理人口学の方法を用いて日本の現状と自身の研究を講演した。インド側の反応は自分たちの研究所でも積極的に数理人口学に取り組む必要があると肯定的な意見をいただいた。

インドは2023年に中国を抜いて世界一の人口を保有する国家となると言われる。一方で、IIPSによるとムンバイのような経済発展都市では先進国同様に人口置換水準を下回る少子化が既に始まっているようだ。インドは現在も経済発展と人口増加が進行中である。これが21世紀の世界情勢の将来を表しているのか、それともこれまでの先進国の過去を見ているのか、今後も日印の交流の中で明らかにしていきたい。（大泉 嶺 記）

第74回数理社会学会大会

第74回数理社会学会大会（JAMS74）は、2023年3月7日（火）・8日（水）の2日間、筑波大学を大会校として開催された。今回は、2019年に熊本県立大学で開催されたJAMS68以来、約3年半ぶりの対面開催であり、発表の合間に、参加者が旧交を温める姿が印象的であった。自由報告（口頭）は13件で、計量・ネットワーク・階層・数理の4部会が設定された。また、とくに対面開催の恩恵があったと感じられたのが萌芽セッションであり、各ポスターの前で、報告者と聴衆のディスカッションが、ほとんど途切れることなく続いていた。それぞれの報告で用いられる分析方法も、回帰モデルを用いた社会調査データの分析にとどまらず、ネットワーク分析や数理モデル、サーベイ実験を用いたものなど多岐にわたり、この学会の特色がよく表れていた。

次回のJAMS75は、2023年8月に愛知大学にて開催予定である。（吉田 航 記）